

長崎大水害を体験して

宮崎 喜美子 (大瀬戸町多良小学校)

私が住んでいた栄町は、眼鏡橋がかかっている中島川沿いの町である。

当日の夜のこと——。隣家からの電話に、私達家族は驚いた。家に水が入って来ており、床上まで浸水しそうだというのである。信じられぬという思いで窓をあけてみると、外は水びたし。午後7時半頃である。30~40cm程の深さで、一面、川の中といった様子であった。たたきつけるような雨が気になってはいたものの、2階にいた私達は、洪水には全く気がつかなかったのである。そして間もなく停電。ラジオからは、ひっきりなしに、土砂くずれのニュース。これは大変なことになったと、家じゅうがあわて出した。父が隣の老人を背負って来た。断水を予想し、水をためておいた。10分後には断水。その間にも、水かさは増し、水面は、階段を1段、2段……と昇ってきている。1階は貸店舗であり、少しでも商品を上へ上げてやればと思ひ、自宅へ何度も電話したが通じない。数回試みた後、やっと通じたが、大浦方面も浸水し、とても出られる状態ではないとのことであった。隣家からは、水につかりながら、貴重品や衣類などを私の家へ運び込み、奥さんが避難して来られた。そして、水位がどんどん上がり、満潮時の午後10時半には、階段の5段目(約1m)までが浸水した。その後、水がひくのは、驚く程早かった。

翌朝、町内の眼鏡橋を見に行くと、石が流さ

れ、無残な姿をさらしていた。また、家のまわりの道路には、泥が足首まで埋まるほど積もり、流木が、山のように重なっていた。乗用車も、軒先に立てかけられた状態になっていたり、ひっくり返っていたりして、水の力のものすごさを示していた。その時、川に直角に走る道路には、泥や流木が多いのに、川に平行に走る道路には、ほとんど泥がないのに気付いた。二者の水流の速さの違いが明らかである。また、私の家は、坂を下りきった所にあり、浸水1mであったが、1つ上の通りでは、全く被害がなく、その境目の線の上下で様子が全く異なり、明暗を分けていた。

その日から1週間は、復旧に明け暮れた。水道、ガス、電話が使えない。ガスが使えないことには調理もできず、食料の調達に駆け回るが、品切ればかりで、食料難の日が続いた。また、隣家では、タンスはきしんで引き出せないし、衣類は泥だらけ、畳は水を含んで非常に重くなっていた。家の中が片付くにつれ、道路は各家庭から出された廃棄物の山で、悪臭が鼻をつく。そして、なんとか元に戻ったのは、8月に入ってからであった。

何もかもが初めてのことで、不自由な日々を過ごしたが、人命をなくされた方々に比べれば、被害はなかったに等しい。それでも、自然のものすごさ、天災の恐ろしさを、まざまざと思い知らされたできごとであった。